

江戸時代の版木で双六を再現しました

この度、江戸時代（嘉永年間）の仙台版元の双六の版木を入手することができ、（財）アダチ伝統木版画技術保存財団のご尽力で、二つの双六を現代に再現いたしました。源氏の武者双六と東海道五十三次の道中双六です。いずれも定番の人気双六で、当時の庶民の夢や憧れが双六の特徴である「ドラマ展開の一覧性」となって表現されています。紙も墨も最高のものを使用しました。江戸時代の仙台の町に思いを馳せつつ、この絵双六で遊んでみてください。

平成 26 年 春 築地双六館館長 吉田修

■双六について

①「新版英雄武者すごろく」：振出しから、源平ゆかりの武者である源頼政、平則経、平忠度らを経て、上がりは「源頼朝公」。具足や鎧は、武者それぞれの味わいがあります。前九年の役で活躍した清原武則が、「上がり」の近くに位置づけられていることは仙台版元らしい着想です。端午の節句に因んだ「武者絵」として、ご子息（がいらっしゃれば）の健やかな成長をお祝いする双六でもあります。

②「新版道中名所席雙六」：振出しは富士山に見える「日本橋」。「品川へ二里」と次の宿場までの距離が表示されています。東海道の各宿場を経て「京」で内裏に参内して上がり。ユーモラスでシンプルな線で宿場の風情が描かれています。

■版元について

版木には「仙台国分町十九軒 菅原屋安兵衛板」と彫られています。菅原屋は江戸後期に「諸方早見道中記」などを出版した仙台の大きな版元でした。ある調査（※1）によれば、江戸時代を通じた出版版元の総数は 3653。京（1449）、江戸（1039）、大坂（743）で全国の 87%を占めており、それに名古屋（72）、仙台（30）が続いています。仙台は、当時全国ナンバー 5 の都市として、このような定番双六が売れるほどの地域経済や庶民文化の基盤が充実していたと思われます（※2）。

■版木について

大変堅い山桜の版木の裏表に上記二つの双六が彫られています。多色刷り版画では 5～6 枚程度の版木に分けて色を重ねますが、墨一色の版画では 1 枚の版木に精緻に彫り込まれており、版木自体が大変美しく、彫り師の技を見て取ることができます。

■和紙について

越前生漉奉書（えちぜん きずきほうしょ）を使用しました。福井県越前市にある和紙の里で、人間国宝の岩野市兵衛氏が、楮（こうぞ）100%で漉いた奉書紙です。手触りや質感もお楽しみください。

■墨について

墨は、奈良の古梅園から購入した折れ墨（書などに使うために作られた墨の折れてしまった

もの) を使いました。これを瓶に入れ、水に浸して半年から一年寝かしてふやかします。その後、上部に浮いた膠(にかわ) 分を除き、墨の部分を取り出します。すり鉢で深い照りが出るまで混ぜます。この作業を数回行い、使用しています。実際に摺る際には、墨に水を入れるのみです。市販の墨汁では、膠が入っており、摺ると光ってしまいます。

※1 参考文献

- ・「江戸時代の出版文化と都市」(中島直子・お茶の水地理」第21号(1980))の“出版地と版元数”の調査結果を参考にしました。
- ・「徳川時代の出版物・出版者集覧(全2巻2)」(矢島玄亮編(1976)仙台万葉堂)には、江戸時代270年間の出版物17000点が収められています。

※2 補足

上記「江戸時代の出版文化と都市」の調査によれば、東日本大震災で被災された5県(青森、岩手、宮城、福島、茨城)における江戸時代の出版版元数を合計すると63であり、名古屋に匹敵する規模となります。出版業は、城下町と港町で発達し、知的インフラとして、当該地域文化の振興に果たした役割は大きいものでありました。今回の仙戸の版木からは、江戸時代の東北の城下町や港町の繁栄振りに思いを馳せることができます。東日本大震災の被災者の皆様に心からお見舞いを申し上げます。 以上



アダチ財団の擦り師



武者双六の版木(コマ)



道中双六と版元



武者双六の版木(全体)